

句紀の玉川

三

利9  
3869  
12



9  
3269  
12

大正七年三月廿一日  
空井平藏氏贈

序

此玉川三編を多し集く事遅く  
青地園の先生よりして致す可  
浪花十二家を抄りて清純  
謂古地之性又かきつるの  
さかて古きと流るるあ  
綴る今もその東西の草  
家傑白と見ゆる如く似  
選る所の好嫌をあらわす

虚言を扱ひて終る事  
死にたゞしをそなたに  
あつた磨く玉川集の  
意にそつ序辭のこゝ

清花仙

廿七童叟

夕政癸未

林待吉辰



東明葎蘭戸選

中カラ

あつたの意月よむし  
ろ海東と書物ひも  
れうし備る存の標

ハハ

しヤウ  
ミヤシ  
案あつた書物ひも  
あつたの意月よむし

牧の弱あつた骨

浦丸 多答 清丸 秋月 二本 和丸 壽丸 清丸

その様もまたいふ所ある所なりぬ  
 ホキウ 昔の心もあつて虎も嫉し一うり  
 夕七に 猿も嫉し目もあつて狐も嫉し一うり  
 シコウ 知れぬ所もあつて礼も入内 猿  
 マカ 眉、ちりしりの海もあつた  
 イオム 彦の事さうくく噂もあつた  
 中カウ 大母房故座行けり嫉し一うり  
 ハタチ 御さ大ケツク 吾てけり甲斐友  
 ハハ 子あふあ白凡古丸名も亦

二寄山  
 砥子  
 彦吾  
 崇喜  
 照彦  
 彦吾  
 松園  
 露園  
 岩丸

ハス 巴 ちりしりの角力たひひ多勢持  
 十二ハ 申出り遊さるお人、一うり  
 マカ 名もあつて一うり多勢持  
 千モユ 彦彦て噂ひ持りも噂の一字  
 中 古縁新しうく噂ひ名もあつた  
 タマカ ちりしりの事もあつた  
 シウ 彦彦もあつた  
 シウニ 彦彦もあつた  
 ケウ 彦彦もあつた

高山  
 左  
 原丸  
 一寄  
 松園  
 里蝶  
 清丸  
 竹馬  
 桂雨

お後々園より外交の事を知り  
 して一姉とてあはれく〜子を残す  
 ホキムお妻の事とて〜産也付  
 丁 心の遠り病生夜更知  
 十ツタ仲人の妻もそあはれを待ぬ  
 イツツ病を連て起す〜あはれ  
 ニム 業の白ひとむらさけ  
 コナシ能く事入退之の時と解りし  
 キノタ金房とてあると世々の耕々為  
 清丸 舟月 松園 志柳 浦丸 墨矢 長花

トノタ病もも音ね人〜子を残す  
 イツツ病を連て起す〜あはれ  
 不男の事とて〜産也付  
 更 園より〜病ひと解りし  
 舟月の事とて〜産也付  
 イツツ病を連て起す〜あはれ  
 セイタ病を連て起す〜あはれ  
 マカ 業の白ひとむらさけ  
 ナムコ長花の事とて〜産也付  
 友丸 志柳 浦丸 墨矢 長花 舟月 松園 志柳 浦丸 墨矢 長花

テモクモ群くもれて虫ゆらさる  
十ハ申路りよ茶おな娘もはるのよ

イム一輪暁る物よあ起

イイ千妹も修業をさううも多きあか

ヒヤウセウてヤリもりかを先ううん

ホキウあう群てさ来あかし祝のあ

ノミツるもさうとあかきうて

シヤウ麻ひのらさるのふり代もあ

あうう、情いさくあうこのあ

志友

清丸

止好

平夏

極溪

多吉

竹馬

志友

五柳

イタスまゆをさうとあか源とさ

カノ 知事あうてあかあうさる

セエタああああああああああ

アオムああああああああああ

ホキウああああああああああ

キイハああああああああああ

キリナああああああああああ

タヒヒああああああああああ

志友

多吉

眠子

遊志

空

夏月

千水

如木

清丸

セイタ 絶望の岩子 志をこ 猿 視  
イタス 糸 絶望の綱 喰ふ 籠り 穉う 志  
キリナ 糸 喰ふ 籠り 穉う 志  
イフ 糸 喰ふ 籠り 穉う 志  
中カラ 親の代り 喰ふ 籠り 穉う 志  
シフ 糸 喰ふ 籠り 穉う 志  
タヒシ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
ココ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
ハタ イ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志

里矢  
志志  
一毛  
柳溪  
百女  
糸柳  
月心  
夏丸  
信丸

ココ 別イ 志をこ 志をこ

シヤウ 子代の 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
セイタ 糸 喰ふ 籠り 穉う 志  
シヤウ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
ハハ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
シユシ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
リスン 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
ノチノ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志  
キノチ 籠り 喰ふ 籠り 穉う 志

志柳  
糸子  
志柳  
志友  
止好  
宗虎  
原丸  
お本  
松園

三  
 人の海のぬれをくしつる能く  
 中カウ志女房も内へからんを針を  
 へもつはうせとて極る極りては縁を  
 三ウ 志女房も内へからんを針を  
 十ツク回文 申く教をいじりて 田植り  
 ソカク 志女房の影を何事も苦くさぬ  
 不業 志女房も内へからんを針を  
 イタス 志女房も内へからんを針を  
 ココ 志女房も内へからんを針を

十一ハ 申く何事も苦くさぬ  
 カ 志女房も内へからんを針を  
 セイタ 志女房も内へからんを針を  
 タマロ 志女房も内へからんを針を  
 男 志女房も内へからんを針を  
 マカ 志女房も内へからんを針を  
 シタ 志女房も内へからんを針を  
 タヒヒ 志女房も内へからんを針を

友人  
 百女  
 志女  
 友人  
 志女  
 友人  
 志女  
 友人  
 志女  
 友人  
 志女

一色  
 志友  
 竹馬  
 志友  
 志友  
 志友  
 志友  
 志友  
 志友  
 志友



百子ののち利て信る三百月  
しこし何とてさるべきしこちるを舟  
ノタマ伴とてさる夜と信をぬ舞の舞

森とてさるのさるた笛  
をのえ終りたるおとむりもたる  
親父のちそのちそのちの晩も父  
格とてさるちのちのち  
物んとてさる人もおとむり  
夜とてさるのちのちのち

百子 桂西 夏丸 松園 子水 夏月 梅枝 浮丸 遊志

よのちのちのちのちのちのち  
まのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち  
よのちのちのちのちのちのち

夏月 浦丸 南北 浦丸 如竹 遊志 左 左 左

後を流し 形家の後  
 藤人よちを借る 形家の一つ居  
 若くは流しを寄る 肩のわい回生  
 宿の片のまゝに流しをよる  
 巻軸 延びたりて 修好 流しを寄り  
 管弦 齊奏 閣選

居丸  
 南北  
 形家  
 片寄  
 巻軸

巻頭 古名たの纏のまれ 命のわいのま  
 暖のさうし 肩のむい 池  
 枕のし 柳の流の 株にま

遊志  
 多音  
 形家

のびのほく 池のい 石のま 谷のち  
 一柳のま 柳のま 長源  
 中 形の家 流しを寄る 好く  
 後 形の家 流しを寄る 好く  
 形の家 流しを寄る 好く  
 形の家 流しを寄る 好く  
 形の家 流しを寄る 好く  
 形の家 流しを寄る 好く  
 形の家 流しを寄る 好く

居丸  
 志丸  
 浦丸  
 松岡  
 志友

名のきりし海画のしりし母屋に  
 小角力丸茶の宮人破をきりし  
 浪とすし 此意のしりし 此意のしりし  
 諸君のしりし 此意のしりし  
 一はのしりし 此意のしりし  
 此意のしりし 此意のしりし  
 本仍存此のしりし 此意のしりし  
 此意のしりし 此意のしりし  
 此意のしりし 此意のしりし

南条 一毛 壽山 小角 秋月 此意 百女 此意

此のきりし海画のしりし母屋に  
 小角力丸茶の宮人破をきりし  
 浪とすし 此意のしりし 此意のしりし  
 諸君のしりし 此意のしりし  
 一はのしりし 此意のしりし  
 此意のしりし 此意のしりし  
 本仍存此のしりし 此意のしりし  
 此意のしりし 此意のしりし  
 此意のしりし 此意のしりし

小島 此意 松園 此意 松丸 此意 遊春 此意 巴野 此意 此意

勢あつたまのそ 借をそまう  
氣あつたまのそ 後より向かへ  
るまのそあつたま 新まう  
まのそあつたま 借をのさう  
あつたま 借をのさう  
まのそあつたま 借をのさう  
あつたま 借をのさう  
あつたま 借をのさう

南春  
春月  
夫来  
原丸  
志梅  
月心  
浦丸  
一壽  
行馬

母のそまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう  
あつたまのそ 借をのさう

志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友

併くくまひて青おのれきる多むひ  
碎きんんぬとくおの道く元のみ  
田植日如松のあき産と結新  
強くしてえね三流と為建  
移りゆくものさ替むり強好  
姉の候又と候しう嗚をせり  
亮くあき産との内取く文五  
知くあんと抄のく元まぬ後  
老せると何討ても結のきぬ歌

菊山  
重友  
一壽  
遊志  
竹馬  
白  
若寺  
照亭  
志柿

強か幕を打のくさのくあ山  
移りゆくものさ替むり強好  
至祥よりえれてまゆり層層  
千鶴のくあ幕を拂ひ半自候  
己の多しと白引く運のくあ  
知くあんと抄のく元まぬ後  
はあのみくまきとまのく元  
無くまきとまのく元まぬ後  
宵くけりまきとまのく元

お木  
竹馬  
志友  
松岡  
百々  
若寺  
重友  
白  
二番山



松園の夕暮秋を詠む  
 藤丸の御一層丸を侍る  
 侍も嫌うしこもや  
 松園  
 藤丸  
 出本  
 侍  
 侍馬  
 一毛  
 一侍

其流の死を流しぬ  
 丸川  
 紙花と暮る  
 松丸  
 文正  
 藤丸  
 浦丸  
 一侍

孫原のそまゝを愛する時々の  
その體れわさねを今下之  
師の程博徳之流厨の陽春  
とまゝ人をもとめりて物のみ  
記念あり子の跡の涙  
國の睡て豆版地の世日の息を  
危き侍もさへ終るあり  
あゝとれたは採原の原向り  
おとをせられて形もも致さ

多若 青山 浦丸 高尾 垂角 一斗 高尾 遊若

娘を孫丸吸入して持場  
今も花の建てハ又の持ぬを  
其後ののわら仁くさる葉は  
古語のくさるを致す也  
多柄はて度々親よきを致す  
殺し多入場鬼の歌  
鶯のそまゝ一伐を喰ひぬ  
ふてのそまゝ一十枝を喰ひぬ  
巻軸 形ももたはてえられと社の月と雲

青山 孫丸 松園 白 出本 一乞 原丸 多若 原丸



浅茅萃羅山選

春頭 近紅の白くはまゝのくしり

あまのそとぬたをよちあそく

そ袖もや似合ぬ遊ひ初めの日

なもそくくそそ板の音

阿也くおる梅枝たの梅の夏

室よりよそそ好くしきり

おおとくしきり運入ちを

弦よりよそしけりもまの仁ま

遊志

お木

里様

夏月

浦丸

竹馬

志友

竹馬

親あまのそとそそて浦山

そそのおれおくしけりよそあぬ

そそのおとかりておとる玉

ちららのそりそりおりのそり

おとを移れてりよそ月

おく庭向ておとを移れてりよ

そそのおとかりておとる玉

おとを移れてりよそ月

おとを移れてりよそ月

若童

若童

若童

若童

若童

若童

若童

若童

若童

此のあきの雲霞掃——松の音  
 他人のの今もさういふを賀の淋  
 冬の利の梅はまねたの納豆汁  
 鴉子の歌とさぶりの友に  
 穂とけ後考よもろ 松人  
 始八句力 雁—— 夏子新巻  
 鳥羽の書よよふおのの燈  
 冬とてそらとてふくは秋の  
 書物よ浪巻松穂は海

志友  
 松枝  
 丹堂  
 多喜  
 左  
 千瓢  
 飯子  
 清山  
 一壽

去冬のの夢をいふせとて——  
 竹馬  
 文和  
 平城  
 志友  
 友丸  
 一毛  
 清丸  
 遊志  
 素未

竹馬  
 文和  
 平城  
 志友  
 友丸  
 一毛  
 清丸  
 遊志  
 素未

海納と人強よ 是る東の山  
ふんせぬ物て又しーまうふ  
白妙とや記記して不業  
そ解とそまふれ帯ぬ曲舞の所  
勇婦の眉もよも紙まのそ靴  
奇くも元云りれさ度か出しよふ  
鳴傳梅燈りの人もふたす  
系流てまをてかまの流然り  
雲々の見えん形入行を傳

黒森 松園 多若 甘露 多若 松園 多若 多若

あはれく海のちのふん ちりのま

伊波海もつ屋業の内

後くてもも南うて東と云傳せさ  
昔とて月のあふひりそまうか  
えん記とやのめよふも時かてお  
海能とまよさまふれさかろりさ

物つ名目の名まふの名屋世姨の名

松のまうくくよ海の船んれ

時とて柳と花の向ふはまの房

子龍 志柳 夏月 秋風 多若 南春 音月 止好 行馬

名をききおはせ能の在りては紀川  
一はりのあきまの事よは猶きまに  
一日の事も人々をきか仕  
石舟の事とてはあつたは  
衣櫛よまのころるを纏  
梅より物よふの事とては  
誰より比る事とてはふり  
まけよあつたはあつたは  
人日の事とてはあつたは

百廿  
多音  
重城  
お本  
岩丸  
音月  
清丸  
月心  
清山

翠崎よも二つと佩よりあつたは  
尾もこの事とてはあつたは  
親の事よまの事とてはあつたは  
秋とてはあつたはあつたは  
十指の事とてはあつたは  
忍の事とてはあつたは  
元の事とてはあつたは  
あつたはあつたはあつたは  
あつたはあつたはあつたは

美奈  
志友  
急柿  
里棟  
清山  
左  
左  
林麻  
友丸

十八

為服との為の所難とありて  
七ツの一はわきりも人の口  
好のそとふりきりし某候

一國一嶺めんとして帯

あがり人々遊々たりもあま  
侍所の親喉より新子今日の日  
あううう海門中をさるる  
いふも大國の氣を新子に  
極く麻向けて仕てきりあま

故人

石子

古井

岩丸

南春

徳丸

竹馬

浦丸

梨丸

三橋がしらの妻の病はあつた

梅のほほのそとをきりたけり

既ちしつとせのけの松

杉まうしつとせのけの松

浮平の男根をきりたけり

ちびらと梅子の病はあつた

作まは梅子の病をきりたけり

三橋の病はあつた

おまの病はあつた

三橋

梅子

松

杉

浮平

ちびら

梅子

三橋

おま



延紙考より新考より取らるる  
海峽と云ふ所は元の海より

本稿を著し一考と云ふ

片能く記しひるふの代

石より民のしやと編の考

一々の修をの事帯し玉を故

々々々々々々々々々々々々々々

牡丹の考と云ふ所はウシテカニ

るしは元より考をいふ

延紙

海峽

本稿

片能

石より

一々の

々々々々

牡丹の

るしは

おのころよりしやと編の考

々々々々々々々々々々々々々々

向の紙の考と云ふ所はウシテカニ

るしは元より考をいふ

巻軸の考と云ふ所はウシテカニ

熱心斎止好選

巻頭考の考と云ふ所はウシテカニ

向の紙の考と云ふ所はウシテカニ

物考の考と云ふ所はウシテカニ

延紙

海峽

本稿

片能

石より

一々の

々々々々

牡丹の

るしは

おもしろいこと書かれて平外  
吹雪くもさもこそ果敢あり  
砂ふれの新しきもまたの物  
陰徳と一歩もさなく心し然  
新報物こそ活き好景  
急ぎの苦いも名師を頼りて  
物と波ふかや弁言もあつて  
十のの運と波さくも逆程を  
射らぬとさすも波さくもたつて

古木  
露草  
古木  
千城  
名香  
松園  
舟月  
古木  
松園

あつては心持おもしろい物ふみ  
一子一孫のぬき産月の影  
去来夢を道して雲を去るの影  
三層の雲さくくも波さくもたつて  
婦さくくも波さくもたつて  
月さくくも波さくもたつて  
雲さくくも波さくもたつて  
雲さくくも波さくもたつて  
雲さくくも波さくもたつて  
雲さくくも波さくもたつて  
雲さくくも波さくもたつて

去来  
一毛  
舟山  
名香  
千城  
古木  
古木  
古木  
古木



吾福喜の安んずるに  
危せんの中つゝま子の橋

紫

回文

記念あつ子の駒の洞

紫

一時近の産色 枝

志友

花の可く 橋とけり 工

全

砂を視て 其の影を 連

一正

去軍ありを 多のて 強て

友丸

物つゝ 孝子や 敬あつ

志

回文 院つゝ 能路も 子れ 砂と 院

全

八の号を 連よ 記つて つ

壽山

母のまゝ 子まゝ ね馬まの

南北

長くの 階居合よ 能氣の

壽山

一色 橋つ 深い 多路の

一色

而して 遠く 橋を 通て

壽山

何れも あり なく 橋の

院

橋つゝ 月この 橋つ

原丸

物つゝ 月この 橋つ

壽山

物の 宛つゝ 橋つ

橋丸

多ゆてそま新野の多勢を  
強むの由りたれにわらふそ  
ゆふに紅紙の多勢を

香山  
多勢  
南北

万の多勢を新野に

多勢

亦仍將死り申すも七帝の  
神をよみ申すも

多勢

神をよみ申すも

多勢

声もよみ申すも

多勢

何ゆりそまのりはたかく  
多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

多勢の妙に

多勢

孫くちを修らば路の二ツ居  
今給うと柳を御の身心  
預か帯りて灯の火をのまぬ

王宮修らば路の二ツ居

十種。そのまはりの。集の集  
同修らば路の二ツ居  
修らば路の二ツ居  
おまらくは修らば路の二ツ居  
聖徳の。そのまはりの。集の集

南北  
壽山  
ちん  
白  
香山  
露田  
小田  
松園  
壽山

親皇くちを修らば路の二ツ居  
百種修らば路の二ツ居  
姫くちを修らば路の二ツ居  
太后も修らば路の二ツ居  
世の修らば路の二ツ居  
いふくちを修らば路の二ツ居  
万人の修らば路の二ツ居  
そのまはりの。集の集  
今下りて修らば路の二ツ居

養年  
浦丸  
遊志  
清丸  
月心  
露田  
御子  
若事  
お本

山あつてもやうき花の初子

志友

先きの花の内取く文の

其意

札うへ備へ花の株法く知

替

花の淡き花を流す

志友

今月の花は花連と花は花

選志

花の白く花は花は花

其意

花の是かうく花を花連と花

其母

花の物く花は花は花

其母

花の物く花は花は花

其母

さうし〜花は花は花

松園

花は花は花は花

志旭

花は花は花は花

其意

花は花は花は花

松園

花は花は花は花

浦元

花は花は花は花

其意

花は花は花は花

志友

花は花は花は花

其意

花は花は花は花

志友

去る年とよめて 虎もさすしうと  
一 群入る 運ぶやくち内達を延  
多ひく 病く 遊卒の 戒張  
下 終能く 筆屋 運ぶ 天え  
まゝ 忍痛の 返りぬも 向 飛家  
九 筆の 果て 換 序の 候心  
棧 渡く 途て ひと 糸 ちよ 大  
三 丁 せき せん ちよ 返入 せん 江  
画 画 へ 入る ちよ ちよ ちよ 飛 飛 飛

瓶子  
系柳  
子龍  
浦丸  
壽山  
松園  
五折  
岩元  
遊志

まゝ 存人の まゝ 居の 所  
和 成 どの 内 食 物 どの 愛 ち ね  
余 亦 の 能く ちよ 能く 心 ね ち ね  
和 折 ちよ ちよ 返 入 ちよ ちよ  
お 書 きの 夏 祭 の 物 ちよ ちよ の 杖  
お の 書 きの ちよ 編 ちよ ちよ の 書 ちよ  
致 ちよ 致 ちよ ちよ ちよ ちよ  
致 ちよ 致 ちよ ちよ ちよ ちよ  
致 ちよ 致 ちよ ちよ ちよ ちよ  
致 ちよ 致 ちよ ちよ ちよ ちよ

浦丸  
一正  
左  
志愛  
志旭  
岩元  
五人  
志好  
南地

雪舟の庵 檜のりまてあは 一乞

行時めこのこ牛道 隠志

我々の穉を又習ふ穉を時 松溪

海舟のいふは我々のまふ 行馬

他云修んふはゆは一子史 詩山

三人とて南くふ米分産 岸邊

大勢の龍をよまてこまて一子史 巨

仲岳も二本佩きり志を何り 花東

は流巻波、玉川の角力集 多若

巻軸 多子代を獲る 四人の書を書り 一正

吳竹菴一詩選

巻頭 画あてんてあてたあたる書の臨 隠志

一はくを細く持めあらの空 松屋

夏もあにきたるに西化の根 南北

己つたしよあをわつる字一物 古本

延にのそくて候約法よ始 茶亭

あつるよあ終てくた歌枕 多若

あつるよあ終てくた歌枕 茶亭

かへ

形あるの破稿子終日狂言の所  
と形なき人やらんせと死車は  
極大秋と秋遠なる自殺の状  
跡をよし服とさきせ。鳴。細の垢  
入おとさきももさきとまの意を  
蓋の形もや金より懐を致  
昨の白々アも死スるもけい殺  
櫻庵の書よ我おの喉

古本  
居凡  
杏山  
夏月  
志友  
松岡  
若山  
脚子  
懸志

ち形画ハち形ひもまふあは  
はあのかのさふよ 孫めこころをせ  
あけぬ法合自あて様ささく  
娘とる能く乳吸ゆる終場  
修子よむとまふ様あまの素  
娘ももの孫然ももさきあま  
除の節もや朝こころもあつた  
義武の御し一凡あて修回を借  
流形をよんでまの感路を

流丸  
若山  
多若  
若山  
紫雲  
梅蘇  
竹馬  
若山  
文玉

廿九





そのんてきうり細てん目の選老書  
程子のそとたけの藤て新  
酔居てまゝのも信老の藤て新  
ちやよふ村のちやよ 百の結  
一瓢とて余強の松を地と軍指  
さしきぬのも程子の藤て新  
腰巻灯ちやよの藤て新  
片能よ家よの苗代  
そ後のの藤て新の藤て新の藤て新

油丸  
林麻  
夏井  
百母  
赤山  
正好  
赤山  
五柳  
五月

己こまの藤のそとたけの藤て新  
あつてたけの藤て新の藤て新  
おあつてたけの藤て新の藤て新  
何れぬとたけの藤て新の藤て新  
院むりハ考考院の藤て新の藤て新  
お信りよ藤て新の藤て新の藤て新  
酒の藤て新の藤て新の藤て新  
信りよ藤て新の藤て新の藤て新  
葉あつて藤て新の藤て新の藤て新

赤山  
赤人  
藤丸  
梅枝  
赤山  
照亭  
松尾  
赤山  
珠石

大岡の歌 山 山 もらうらゝの  
 信守と 檀香と 丁と 二代 香を  
 三輝の しの けり子の 宿子 藤系  
 志友 昔も せぬ 入 海家  
 信守の おと 剛と 歌の 名  
 何と ともよ あらう 三 沿 杉 下 口  
 まの 遠 五 五 ぬ 一 一 ね の 角 の  
 院 多 と まれ と 足 も 群 の 時  
 牙と 如し や 福 入 ち だ 狂 人

一正  
 月心  
 友人  
 臨考  
 志友  
 糸柳  
 遊志  
 友人  
 里矣

世帯の 原り けあも せき  
 申の 衣 連と せ せ 房の 折と 吉 何  
 ちあ 長 の ちあよ 何と ちも 三 母の 歌  
 三 朝 月 の 居 交え 藤 和  
 ちあ ちあ 氣が 何と ちり ちあ ちあ  
 糸の 氣 ちあ ぬ 下 曲と 更し ち  
 一 け ち ちあ 男の ちあ ちあ ちあ ちあ  
 昔の 遠 入 ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ  
 一 ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ

藤丸  
 丹彦  
 子親  
 出雲  
 東北  
 友九  
 梅枝  
 ち本  
 早彦

移すも心もこの柳のまゝ角行の  
南の道はまゝの心も葉が片有るぬ  
竹の影のまゝをくまゝの妹のま  
まゝの心も移すも運んぬの心  
まゝの心も移すも然の心も介  
親くまゝの心も移すも運んぬ  
心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも

流連  
平夏  
山窓  
志友  
一正  
名香  
三月  
香也  
止好

春も心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも  
心も移すも心も移すも心も移すも心も移すも

香山  
松園  
百廿  
香南  
故人  
松園  
秋月  
私凡  
古本

今ハびりまると御さ 細の女 秋月  
 昔まをて終らまの月まぬ昔まをて 蒙亭  
 海も勝もまも勝らぬ 年まの雲 冬春  
 夜寝を 跡もまをてまのま 南北  
 鴨もま多し 経てつら 秋月  
 丸端まを 作ら 作ら 百廿  
 海まの 旭お陸を 運入 梅丸  
 老成の 雲りまの 鳴る 大徳 博丸  
 なまの 氣の 運所 取り色 松園

高流てまをて かなを 流能がり 老来  
 秋の 海も 男 傷り 昔の 雲 照亭  
 海池も 切 挽も 昔 衣 補丸  
 悲の まを 喉 一 けの 運の 船 竹馬  
 まの 運 返 流 したん 岬 志 臨志  
 流 物 した 志の 雲 したん 海 梅丸  
 跡 したん 志 名 流 したん 衣 冬春  
 中 したん 志 折 したん 志 したん 照亭  
 丸 したん 志 折 したん 志 したん 照亭

撫子伊をよめるは京

上代を家遠りし新を浦多深

是法は酒結前も来れ共念仏

考るまよふ元統の梅おき色

抱さるる人擲まらうも人

巻軸 後の書ぶる人あり曲鞠の灯

南六村巴勢選

巻頭 けりも是てまよふ世のさけ髪

後作の国是とほりてさるる人

村藤

志友

逸志

松園

深雪

梅枝

重人

松園

けりしわ若さの春ぬと柳のけ

ノとてまよはるるものも杖の役

世のまよふ念仏のそと花の山

新新してまよふ燈の借御

初め髪まき一月日と云ふとのみ

難多様てまよふおのちの味

墨丸の油けりおむさこの端

ちまひくまよふもあつてむい

婦よまよふてまよふ足つ侍

浦丸

逸志

雨虎

左

松園

一秀

梅枝

香山

百女

後を借り物常月と書  
 牙の程く御書の付く字の余  
 又そちのやうに御書の程を  
 出物に改書あるは終るまで  
 改ち改るあつたことよき國の出  
 命りたはつた書の出る日  
 宗家の程を知らしむるにや例  
 且御書く人きんせとむ率の解  
 庶西の字の書はる程書を請問  
 一毛  
 松岡  
 山  
 一毛  
 百女  
 森  
 森  
 九  
 浦九

書をむくこと遠り程の建ん  
 仔細な法を御書する書は  
 宗家の書は御書する母の程  
 抄式あるは程の書する  
 恐るゝ程はかの書する  
 子の肉も書はる程を御書する  
 又そちの程を御書する程  
 一統の書はる程の書する  
 一統の男を御書する程  
 一毛  
 浦九  
 九  
 森  
 森  
 九  
 浦九

一毛

あつたてのつね月鏡餅さし  
まの者といふの月鏡餅後仲之  
然りしうさく魚の白の松  
徳徳者まの徳徳を秋が冬  
上徳のたをぬさく大八  
かえりしとるは友達の徳と秋  
はまの志くぬはまの徳立  
ちりといふさるる、はまの  
小角かたりまの徳立徳立  
一毛

印如て好む徳く小使  
徳立まの徳立徳立徳立  
徳立一徳立徳立徳立  
おとあつて秋といふ徳立  
おとあつて秋といふ徳立  
徳立を徳立まの徳立  
四月朔日徳立徳立  
徳立まの徳立徳立徳立  
徳立まの徳立徳立徳立  
徳立まの徳立徳立徳立

男は松嶽の納も統、

一々を納めて拂ふ者の意

糸乃ハ滑く振動飛トシ

殺し、管の振動の歌

第ノハ舞はまの遊辰ハ

其の世居多急の世の事多し

其の世居多急の世の事多し

其の世居多急の世の事多し

其の世居多急の世の事多し

常南

松園

湧丸

一色

墨塚

原丸

遊志

松丸

南北

花うけと務まんのまろく果

樽柳もて押滑りまをの世

籠子のまろく吹らん実

一色の太ふ柄と、無分別

抱子も有りせうと皮膚自快

花より白くやうく身も暖か

糸端と汗汗係り、

籠子の歌く、藤も

池邊し子舞の始り人の世

松園

湧丸

松丸

南北

墨塚

子舞

糸在

常南

林席



葉内てひの男ハ 冬毛シ  
 一歩入ル道下わと冬内連中  
 出づく 雲の夜ゆ又ハ 呼を撰  
 張りの新毛くも 其の物  
 雲内下 飲日とん 冬毛ハ  
 一 お中あくと 雲毛の 句表  
 拾わぬ 冬物の 中と 藤  
 周毛の新毛と 大勇が  
 冬毛と 冬毛の 藤ハ 藤ハ

遊春 系柳 松丸 之木 冬毛 法丸 系柳 雲毛 冬入

松毛と冬毛ハ 冬毛と 藤ハ 藤ハ  
 院柳と冬毛の 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛ハ 藤ハ  
 松毛と冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ  
 松毛の 冬毛ハ 冬毛の 藤ハ

藤ハ 松丸 一毛 松丸 松丸 松丸 松丸 松丸 松丸 松丸 松丸

飛くもくもあはれ 三才  
 大坂の浪子の死 不化し 神  
 物伝もワイ 脱く不化居心  
 服一よ一つ 暮りよふ 業  
 男磨くは 妙房のうら 勃  
 長刀の梅所 隆の 傍グワ  
 石橋の石や 活かす 仰キ付  
 陰徳と妻の氣 しくの 費ダガリ  
 中二ゆも せイヤのよ せよ 船  
 一毛

たむと 是むく 小勝イ 純珍程  
 一時よ 是のそ 仕島め ちり 拂み  
 何屋ん 妙房の 去る 是のふ  
 虫のこ ちと 暮り あり 遠慮か  
 おの 子よ 名を 向り 妻の 妹 一日  
 三三 辰の 卯の 白 忘れぬ 屋上 結ぶ  
 妻の 氣の 伝 實 居る 是の 替 向  
 痴さ ます けの け 吾で けさ 甲斐  
 ハ かく け 跡の 居 跡の 色  
 志女  
 崇有  
 小田原  
 藤石  
 多吉  
 一毛  
 浦丸  
 彦通  
 遊志

一玉一城ゆんらーと常  
 旅ごりの夢けおの書房でい  
 ホヘン暇さまを免、おろしき  
 せんくらのやあ中の配刺  
 ろう那子持さそ新 雲ん意ふ  
 六丁くよ遺 厚徳の記形  
 松の月 奇人ののよま 酒が冷三  
 長けの強固は居と建 中一  
 さうしく麻向て仕こやる 糸高橋

家元  
 志友  
 志友  
 松元  
 松元  
 竹馬  
 志好  
 浦元  
 和風

移るものよのを愛むより 旅時  
 三層月、嘆の物り  
 閑居のこゝろん 移み 井と刻  
 大龍形をそん 伝まで 浮き方  
 予 鶴居、まを 藤子 井中 月 橋  
 鶴居、まを 藤子 井中 月 橋  
 知出あて 三層月の 三層月の 三層月の  
 申の終りまゝ 三層月の 三層月の  
 程高く 松元 三層月の 三層月の

竹馬  
 志友  
 志友  
 松元  
 松元  
 竹馬  
 志好  
 浦元  
 和風

大母子の賢人修人の思を巻  
巻軸 大岡の龍山 四も終るその  
一本

草月菴書式選

巻頭 聖の白の山とある物のいそぎと  
一書

神識の似合人後三を巻  
一書

花のちりて居てとて一書  
一本

閑居のりてとて一書  
一本

そりむりを酒物、拂ひを巻  
一本

去の海身の人よりつては  
一本

何とそよよはり梅の三書  
浦凡

板尻月ごの縁ハ帯の閑  
多書

海鏡の百姓でても百姓之  
南存

所カ帯を灯の人の花の赤ぬ  
一本

そりむりの人の下り人三書  
一本

待ねの巻に巻く秋の結  
浦凡

元道して巻る眼の四三三の胸  
手帳

系さうして巻る巻の一日路  
文王

何と巻るこの巻も巻房列  
志好

おとこは波標龍でさるる所  
古蹟の傍に古蹟の傍  
三曲の所は龍の山へ入る字三つ  
如世は運の要らぬ所  
ハ世はたまたま人々  
よそ屋の事うたを歩二十地  
橋をいでちかす  
破れぬで  
雪原の雪うん

志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友

おとこは波標龍でさるる所  
古蹟の傍に古蹟の傍  
三曲の所は龍の山へ入る字三つ  
如世は運の要らぬ所  
ハ世はたまたま人々  
よそ屋の事うたを歩二十地  
橋をいでちかす  
破れぬで  
雪原の雪うん

志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友  
志友

椽竹で五月のころを門使 秋月

好む留らうとて麻をまき来 照亭

まらぬうと甘のまらふをだくをい 一毛

方ふふの氣象をへるころのまの 壽山

而であらうとこれ程をせん状 糸柳

いふふのまのつ子の静かなをい 友丸

別く胸の鼓も息もはきまの意 多香

小男の件はまけらる角力も 全

一とらぬ留らうのも杖の役 遊志

羞あふち痛し痛し百の夢 志友

糸ののこ村程でもゆるまを友 竹馬

高貴のやうと書ハ時一ぐり 南孝

初難程もを買ひ居居てを 清丸

ゆらくむ時あもぬ糸の内 辰丸

嫁入か子来いせ版喰ひるい 糸柳

大まき程程よりめけま 糸本

素平の人の物とむし山 松園

まもつと違つて吹雪の義 友丸



妙く此の秘を以てする余より  
 採持て物とせしと則節  
 十も解きて常色をあらけり  
 まりゆりてゆて多きなる角力元  
 扱入の操くさりしもるこし  
 獨とさきりて又いづれ  
 くるる人より後さるる人を信  
 何れかの物の行ふも小風長夏  
 氣で候ふは氣電の始なり

遊志  
 世丸  
 石丸  
 多長  
 子丸  
 柳雨  
 竹島  
 壽山  
 徳丸

ましむ門集候ふまの毎  
 あり揃らつて歌りぬれ集の更  
 事とせつて此の月日候ふし  
 景丸の聖子候ふれた人の  
 人日の雪を七時の始の節  
 了丸の口へふ合を候  
 伴留ははで清は何れもまを待  
 おしひで知るるを候  
 中より解るる候

甘平  
 出本  
 志旭  
 壽山  
 左  
 及丸  
 清丸  
 系柳  
 浦丸



少刺あし部目しを控るる  
九深きう情を竹を影の  
へをを連る影をけはうみ合  
閑能りあり柳暗くう  
少刺めり馬渡の妙をり迎せ  
般若心經 寂滅の事  
雨の雲を夜経の影を懸す  
今ふびくまを控るる影の  
長刀のむし打残の影の

遊志  
百廿  
清山  
勝九  
系柳  
一高  
遊志  
秋月  
新月

田文ゆく身色く廻り 田植うら  
海にまらぬ世のあで纏へる字形  
流るる連る影のたぬや  
今とをまきとあつる影  
あつるあつる影のあつる  
あつるあつる影のあつる  
あつるあつる影のあつる  
あつるあつる影のあつる

遊志  
露運  
夕暮  
志好  
志友  
浦花  
遊志  
お本  
系柳

研めてこそ原より燈の法どやて  
 フミカク文帳よりあけの針さへに  
 おろろあしゆをさへて吹くまいか  
 燐とるる智急知たまひとまのれ  
 一祈る位の傍り自由せぬ  
 中よ何事もすれはさるるの船  
 空の神目よまをる白梅  
 糸よ本頼せりそのの糸かや  
 網々舟もど雲かそえぬ秋とや

林原  
 止好  
 壽山  
 雲夏  
 竹言  
 一光  
 若春  
 冬春  
 秋月

五人とて育くく果を養  
 七牛でやろりお深るくく  
 糸も一軍功も一竿曇差一  
 志さくく内が古気の迹かびん  
 結るまらお室正月  
 紀の美のちをさへ磨く玉川集  
 巻軸 百と忠といもくく民の回柱祝  
 浪花坊言 旧選  
 巻頭 五よ女と雉く日との春と新

若春  
 松溪  
 壽山  
 左  
 忍志  
 全  
 若木  
 一正

ツイ押せの四の功きよの海鏡  
 禁の酒信の海は塵の衣さの成  
 翁さうのいのさぬまのん房の内  
 井よりつら珍籠をむくの月の秋  
 焼双の湯をさる物に流連  
 らまわりの花あがのらぬぬ  
 雨の妻をな後後の物に膝すの  
 ちの介の公若さうあの花は猶  
 河飛院部とめて梅さるる

浦元  
 舟舟  
 梅丸  
 志友  
 三月  
 松園  
 遊志  
 梅枝  
 飛入

いまのつて思ひをさくつ四まの歌  
 海さけの娘花のうも梅さの侍  
 新や後がさるあ何れとさるる  
 妻の所をさるらとさるる  
 化縁の船を疾し日の舟  
 実のつらと歌て歌て花の歌  
 崎とさるるを判るるさるる  
 梅のよめをさるる花丸  
 ちのいのちをさるる梅さるる

心入  
 南北  
 壽山  
 梅丸  
 梅枝  
 志友  
 志友  
 志友

物に人あて解るるも浮の元  
 親の夕日よあけぬの御逢  
 更向ふ知はれはひ存まき  
 老也帝あ月へ隠れ玉針をり  
 於細のまき返て玉そ流の杖  
 子梅を梅よ智て陸眼ハ  
 ろり初ねのまき一玉の毛  
 及橋わく中め新くはり  
 獨美月の遠く存留た  
 南北  
 遊志  
 多若  
 百女  
 如所  
 多若  
 若山  
 一荷  
 紫香

撫れうるそ便ハあよ玉返し  
 就き親まき玉返の親と親  
 長権あく工合の知あぬ疎巻  
 程原のそり玉玉の毒くは  
 上首尾が毒くは玉毒二千幼  
 親くくくくもあの行まはさ  
 宗あつたあつた月のあまつた  
 禁ちあつたあつたあち端  
 戸結とまき入婚とまき  
 寸出  
 南北  
 老友  
 雲城  
 衣衣  
 親風  
 全  
 墨魚  
 百人

ろくろ下りし忠臣の塚  
秋の竹と逢きし風流の結  
雪の原の雪の原の結を  
の部は合ふてまゝまゝ  
三月、わけごとくいふ  
笑の残るし件と竹橋  
眼末さよふら形へ後言  
何おのの物のけりもよ  
おののののののののの

青月  
墨蝶  
糸柿  
志友  
露通  
柱雨  
一壽  
壽山  
赤朱

婦を捕ま新使で能成居  
妻居る款け生え頁一  
高気のはり居るの帯向  
狗より院と尺の結子  
石おがめで嫁の胸さ  
はるる恨を仕舞淋し  
後の三ツ文ヶ廿けし云差  
金堂の三三抄の三ちり  
流しと廿三居人運入る

墨蝶  
雪友  
浦丸  
竹馬  
お木  
空  
竹馬  
壽山  
赤朱

樂のち鼓の秋がらるる

一はくはく其のそらに雲霞

より物けて居て妙は若方け

生か突し吹と一は二世の縁

空かちひやう咲くやう青尾が

そそちよわめて秋ののこ

舞入るる序居五よむむあま

居るくぬとそ居たぐ角力元

そそちよわめて秋ののこ

止好

梅枝

木

拙漢

月心

深雪

梅枝

志友

南北

まはるるあまのこ

妹の羅くまきさ

情けして云いと市松で叶

大石の禱のまれ念ふ日の物

心の音もあまのこ

おしおと悲願其の心

人ふいあまのこ

隠びてあまのこ

懐きてあまのこ

月

青山

志友

志友

志友

志友

志友

志友

志友

初めは厚さのゆる痛をうけても  
嵐のうらみとそよ風をうけて  
静かにしてそよ風をうけて  
静かにしてそよ風をうけて  
静かにしてそよ風をうけて  
静かにしてそよ風をうけて  
静かにしてそよ風をうけて  
静かにしてそよ風をうけて

菊北  
花東  
壽山  
一色  
止好  
壽山  
石女  
林麻  
木本

まごころのあはれ  
あはれも秋と忍びで  
清正の祈り  
小男の件  
三連の歌  
厚さのゆる  
静かにして  
静かにして  
静かにして  
静かにして  
静かにして  
静かにして  
静かにして  
静かにして

志友  
系柳  
多香  
夏月  
花東  
静山  
壽山  
系柳

五十二

もろくをへて酒の樽系は作ら  
まらぬか吾人酒飲の如し力  
多し給の肩より感賞れと歌  
まゝ抗行ぬ髪上帯の垂  
囊中へ納く信をまゝ返るぬ  
まゝとくまりの母とち歌  
店のを酒喫か〜と古らの花  
大々幅と店イ 白を眼の帯  
ありとまぬ候 ぬ房の雲の巻

菊孝 瓦井 多香 管子 糸井 志友 遊志 清元 菊孝

龍のこそと云ふ家合の高  
巻之に根地よりそのかぬ  
一玉一城か〜とて帯  
静るて居ての私とて歌  
名のこれとあお草の強ぬ〜  
ふん男地帯〜とて車へ  
そら若も三歳〜とての草知城  
危の所と後にも仔細を物え連  
後三ま〜とて抄の 酒代

巴背 南北 岸元 山本 志角 平友 林藤 如竹 松岡



昨のり戸より見たの雲 志友  
 春のり戸より見たの雲 志友  
 石の糖と仰クまは似ぬ 浦元  
 今もてしと書きて知めてつる 志友  
 移りては命をとりぬ 竹馬  
 今もてしと書きて知めてつる 志友  
 移りては命をとりぬ 竹馬  
 何事ても似合ふは此の流利自 志友  
 子ぬ森をきく母の志友 志友

巻軸 幾度もつとくおと又の杖 林藤  
 一 満菴虎勇選  
 巻頭 志友の系々似とおもはぬ 干瓢  
 志友の人の似世の目をかきみ 松岡  
 一 世のたぐくうまう角力死 桂雨  
 世のたぐくうまう角力死 秋月  
 樂のき鼓の残りのとき 正好

常力の人々を移しぬるに  
 藤山  
 藤山の人々の自由も  
 志友  
 然の母の母の母も  
 美香  
 花ををれいと又も  
 友人  
 敵山の藤山も  
 遊志  
 何れも何れも  
 松園  
 岩文をまのつと  
 森来  
 好を倒し  
 斎山  
 心も心も  
 志方

常の戸は夏にぬれを  
 遊志  
 石を貫すこと  
 身月  
 家名も書か  
 秀連  
 樂を  
 長春  
 遊の  
 志友  
 母親の終りも  
 浦元  
 三層  
 一層  
 和風  
 清山

すゝそめ選くすすあをさくら色  
あゆみのゆきよすしく角力五  
何のきもあつぬを信らさすまき  
えんちあおを地えうの麻のま  
碓 陸子か 拙く 毛 碓  
我れくはく物てあし 碓きん  
楊花も信られ又の物体ノ  
花うとあ親のまへゆまあ  
稀くへの歌ももろ丸さうさり

竹馬  
志友  
松岡  
満丸  
全  
壽山  
全  
松丸  
土本

まのゆのそめあをを持ゆり色  
き作もあつたゆきやとあさ鯛は  
まろくゆはきすのゆり 杖く先  
洗濯くゆり 松又もろゆはゆり  
村中くまゆきも信てあやぐり  
悠くゆはゆり 松又もろゆはゆり  
あもゆきあゆり 松又もろゆはゆり  
あゆみゆきあゆり 松又もろゆはゆり  
あゆみゆきあゆり 松又もろゆはゆり

遊志  
全  
松丸  
文王  
遊志  
松丸  
遊志

今とてと書く為めて 誓ぐ 跡  
時きくはみど 崎崎 海内 の づら  
牡丹 えさく 形も ち 輝の 輪も の  
ちととる 牙と 細くよきりし

花魁の 夢の 花の まえ  
吾 娘の 髪を まの 髪を 替りし  
吾 父の 髪を 替りし 倍く 三百 円  
松と 流しよ ちの ちを 替  
後く 髪を 我ハ 人の 髪

志友  
家丸  
糸柳  
竹馬  
志友  
多香  
百母  
一毛  
止好

ちの 髪を まの 髪を 替りし  
死 髪も ちの 髪を 替りし  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪  
髪を 替りし 又の 髪

松溪  
南翁  
若香  
志友  
多香  
玉木  
志友  
夏月  
若香

あまのまことまゝにふりし  
中降りいれくぬみかたごそ  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし

浦元  
飛入  
石子  
遊志  
松岡  
遊志  
清山  
露連  
五月

へ朝の一刻もあまのまことまゝにふりし  
宵中を向うま物かぬぬぬ  
のちりまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし  
あまのまことまゝにふりし

志友  
空  
赤柳  
月心  
清丸  
雲蝶  
懸花  
糸柳  
南北

かきりん 顔くまのまの 薄化粧  
ゆい のまのまの 小き足  
布着 紙衣 袖まのまの 白のまの  
草まのまの 草の内まのまの 草まのまの  
町人の物まのまの 又の曲舞の灯  
移居の店まのまの のまの 建まの  
まのまの 居まのまの 居まのまの 居まの  
神松まのまの 居まのまの 居まのまの  
まのまの 居まのまの 居まのまの 居まの

夏丸  
木本  
籠子  
榮亭  
雲城  
左  
月心  
冬春  
一元

第一のまのまの 又のまのまの  
除けのまのまの 又のまのまの  
一門まのまの 又のまのまの  
おのまのまの 又のまのまの  
通のまのまの 又のまのまの  
まのまの 又のまのまの  
結まのまの 又のまのまの  
まのまの 又のまのまの

浦丸  
森丸  
松枝  
森丸  
森丸  
森丸  
森丸  
志友  
原丸

原丸

生んかす料理の仕人の名をいさ  
 上貞常の持て生れとよまふ  
 延向信とよまふ林一ふふ業  
 世の時と又とまうよまうと  
 たまうし白あのみか遍曇  
 娘の果敢と付まづく  
 名成りの女と業たがひふふ師を名  
 新田の幸ふか法かよて二十年  
 名とまうとや房家より母のよの

原丸  
 林藤  
 千水  
 如珠  
 元八  
 藤通  
 藤角  
 一斎  
 菊存

花ぞびりしのおまりの妻  
 ともなふの信とよまうと  
 系の他とよまうと  
 実をともまうと  
 新ふら路ふ屋流お習ふ業  
 宗福とよまうと  
 実も何とよまうと  
 紙で耳中きりて角きく  
 大ゆき房お徳行かて味しり

雲城  
 蘭亭  
 一正  
 小島  
 壽山  
 志友  
 全  
 遊志  
 松園

少おと京さりのまゝし居りしを  
愛ふ今相悪もあつたうさうさ  
あまのちえ 備へて静かき  
何とてこの命も 書居り  
終るよりも 奇いそ強  
郭鶴のまをたか 居て  
白きよりバ 白も 止むら

巻軸 大知為 終ぬよえト わつとる

深草房五嶺選

選志 装目 多表 志好 墨蝶 一壽 松園 笈月

巻頭 花のまろつとを石のまを切

空多由白の静をひのま  
大悪の白ハ遊の静よ 終つとる  
世よ沈み又を流色のまを切  
七の島へまゝは 島をさし  
行つた終るよ 居て  
大々幅も 居りし 白を  
一色の杖よ 居りし 居りし  
樂のまを 終るの 終るの

如本 選志 百々 美香 選志 多表 唐丸 笈丸 上好



天人の役終はるは結の糸

梅枝

晴るり鶯 涼草の味

蕨菜

宿鳥の歌 時をわたり梅も

竹馬

笑ふハ一日有ては能く

松園

心の白髪を梳く 妹も衣

百女

鳥で遊ぶ鳥を 捨つて鳥衣

夕暮

樹を遊ば 鳥衣 鳥衣 鳥衣

夕

サアゆり 狗森 終んで 終る

夕

蛇の這ふ 石大 舞の身

夕

松の祥ふら ありは 江戸 鳥衣

千鶴

阿遊く 鳥衣 梅枝 夕の 鳥衣

浦元

花衣よす 志の 鳥衣 夕の 鳥衣

松丸

新く 松衣 夕の 鳥衣 夕の 鳥衣

心入

始末よ 夕の 鳥衣 夕の 鳥衣

一歩

暮らり 夕の 鳥衣 夕の 鳥衣

壽山

修泊て 夕の 鳥衣 夕の 鳥衣

友人

新く 夕の 鳥衣 夕の 鳥衣

夕暮

夕の 鳥衣 夕の 鳥衣

松園

物とてふらむし多きを小替墳  
仰つて物事の多岐びよ世の許不足  
と代を多達しよ雅を浦の隈

丸うてあるる紙が玉子

初た状と初達する自殺の状  
木の版唄入百戦のスキャンピ  
りそれと雅しごまうこと好と能

突つのもぼく風呂敷の表

一はく雅あかりと乳のまゝ

松岡 桃溪 志友 お木 壽山 子あ 原九 百母 南孝

妻もも山日まうた不化の報  
ソウトはまや轉つてはる如流衣  
かの是わらうや大ま運の事ぬ  
アノ所まほまゝの六田所  
つ雅後と雅入娘のまゝ  
手取とまゝま右唄をた 祿  
己ナ女中も雅が相成雅をヤ  
秋ひ日の青くは東のたが流  
脚も雅と雅ま手院と所と交

南此 博九 百母 逸志 故人 壽山 糸柳 秋月 左

六十四

秋し極色すして山嶽と新  
千鶴居く喜馬屋と柿の舟自勝  
既新くはととに流るる  
関九の一云 両方流能るを  
夏の月 彦彦屋もあやむ  
ち悉の碑く 三身の新を  
弟も一軍印も一筆黄堂  
七小所二小所むら 雨とわさ  
向ふのふく一入のふく眼

志好  
松園  
千鶴  
練石  
秋香  
竹島  
壽山  
湾九  
秋香

葉の片のまふ子孫の  
ゆきの中も 母の 三身  
鏡の夕日よここ 城の仔を  
あまのむら 破りたるあま  
慈どふふでう精果を逐  
更へるも 往てるも 一木  
あはれもいこく 枝の 父の枝  
ちちやとさんのおや 杉屋  
葉の字の才篇 晴や大臣人

葉屋  
松園  
遊志  
竹丸  
菅子  
林藤  
全  
桂雨  
系柳

さし蹴る白のま麻のへり字形  
 惣知くぬ艾の代りたるも建  
 一はよ死と他は他り喰ひ  
 きんくま有るまも知り捨つけ  
 竹タしそゑぬ伝伝のま出  
 美の流ッちまもまも細けり  
 城郭のまカきまもるあり松  
 家ちのましと操まもるおな  
 け籠りし籠りと丁籠のまえ後

行馬  
 全  
 若事  
 壽山  
 森東  
 一壽  
 選志  
 一壽  
 多若

竹籠のまの友ありたり物  
 太切の百姓のまのみ百の結  
 鬼のまの勝鬼と日有る運ま  
 移候の白本おあり作りあり  
 四月朔日候のま書  
 石橋を築くま他は好まの道  
 中絶と路をほははまりしを  
 其飯のままの結 藤の味

一毛  
 南北  
 百女  
 巴勢  
 黒蝶  
 全  
 浦丸  
 徳丸  
 多若

並くの人向てあしる藤をス  
 巴笏  
 其高き處に強の物なる婦を  
 百母  
 用縁ら付てあつて書あし  
 志友  
 之使のたをさぐぐ人  
 遊志  
 之海んでをさしは海く下ん  
 照為  
 神飲新のち極輝をまが足付  
 狂丸  
 翁る百杖杖き入船の尖り足  
 竹馬  
 世整りの又よまごころを  
 月心  
 更もれあ舞を居りのと居るあれり  
 多香

書よ後流り也 重くとさうのふ  
 夕香  
 乃ち新くさ枝をり御の愛ま心  
 壽山  
 能多洲 十二評 一魯五 芦 藤 羅 虎 巴 素 蘭 正  
 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲 能多洲  
 尾の帆とけ新くさるる  
 林原  
 氣よあまをさるる虎使入竹給子  
 森東  
 控守とでち家牙とん巾の表  
 一壽  
 きてあまを人さう送合や人が塔  
 尾丸  
 ち終ると海子の減りお生れ所  
 浦光  
 若成のむらひ牙と子減り 病  
 多香

能多洲

少御殿もさう百村の玉の行  
 信々としておぼろけの子の若小社  
 又海一の山伏をたゞ任せて  
 三光の志をきき重信の傳  
 ありと云はれ又なるて来りや隠  
 那をたれと平景頼の月の影  
 近ははぐりて修約の跡  
 舟はとせぬ頃が偏る  
 白妙の志をたへるが心も突  
 竹馬 多吾 一斎 志友 南光 左 蒙亭 藤連 遊志

へ美のまゝへの解の書せへ  
 名まのく後ひいされてみか  
 願がわき多り多勢で積  
 あり受月今持つと持る 志の友  
 隠居 休と杖と書と付て志  
 三光の志のこり 孫名  
 七光も志で 彌ふとあれ居  
 遊志の口く書おと人と遊  
 三光の志のこり 志をたへる  
 多吾 小田原 河丸 拙漢 藤丸 志友 雲城 遊志 志友

十良終るよ揚々牡丹陽暎又健所 壽山

臨白を多を望 正月 遊志

紀の裏のちとと 磨く五川集 全

巻軸 言のすも実の 柳よ日の空あり 吳香

市中央魯柱選

巻頭 私の輝くふあぐんは戸を光 子胤

修丹の知た陽あふ照るま 若上

厚くをびりしあぐん 松市 志友

夏と冬と光あ智 年々 松園

年寄りのそよみゆか入仔運衣裳 止好

大徳院陽子のけもるる心 秋 木

立身た珠あまれの 貞上人 松園

忠くの沢あまて 孝節 眠子

鳴きやて而能記 吸入る 壽山

一けを豆くらさし 御々 貴人

閑九ハ色くや又遊ケ 遊すハ 梅枝

貞節を物の形も人馬あま 竹馬

紙を花を香を思ふいさく 松丸

昨のゆとりきて浮世と遊歩り  
 母の工操果報も今道々  
 結白布で重れぬ 名物  
 移移五三の事、三母に  
 本妻の事の新新 野の事  
 正妻より新々の事、正妻を  
 足らぬ事と喜生、兄の暗気  
 勝る事と折の事、うぬ隠し  
 親の御おごりと、おの浦の事  
 止好  
 糸栞  
 志友  
 松園  
 全  
 全  
 益人  
 崇亭  
 竹馬

糸玉の事、お福の事、お入  
 勝るとたがひ、うぬをいさだか  
 移の事と、お福の事、お入ら  
 一日の事、お入の事、お入  
 我が事、お入の事、お入の事  
 高実の事、お入の事、お入の事  
 聲、お入の事、お入の事、お入  
 勝の事、お入の事、お入の事  
 事と、お入の事、お入の事、お入  
 進志  
 百女  
 月心  
 如竹  
 土本  
 隆光  
 百女  
 松園  
 進志



一階よりまげて事起りかき  
 鳴りやまごを——唐りの物の志  
 十昌形より拂て牡丹縣境へ修  
 一休とありまが候の世分り  
 流ら戸を念よえん虎溪の島  
 舟も形ゆして花嫁居到陽也  
 男何道者ありの志も孝とて  
 志旭  
 多香  
 青山  
 松岡  
 秋月  
 青山  
 止好  
 若重

何れもそつイ腕の志も修を望  
 終白まゝ人の内や候と  
 禁く形へおまゝを候 負う  
 多う妙と特て一はく——兼  
 今ハ重の志候も 神 退  
 まご形をばうせとておまゝ候  
 ろの志の別イ 修  
 多候がまゝてたふ 孫り形  
 志旭  
 系柿  
 青山  
 志旭  
 兼九  
 遊志  
 若月  
 小園  
 林森

去りんと笑わたりとを焼く  
 細く培りき最人の思をかく  
 碎ぢれよ木の月影を裏の月  
 三つ角くしてはぬ般も峰人喉  
 倍溜してはく半をり 雲の隙  
 雲をぬがるとやと又いふあや狗  
 空のまよと音を吸月たむを望  
 衣表のふ一せ 却て 神杯  
 才とく 狗を能んて其の後  
 遊志  
 左  
 百廿  
 榮亭  
 南北  
 隙子  
 雲城  
 林森  
 夕暮

妙の善想計らなく遠の月  
 伸くしてはく半をり 雲の隙  
 雲をぬがるとやと又いふあや狗  
 空のまよと音を吸月たむを望  
 衣表のふ一せ 却て 神杯  
 才とく 狗を能んて其の後  
 遊志  
 左  
 百廿  
 榮亭  
 南北  
 隙子  
 雲城  
 林森  
 夕暮



菊の香も新秋もさうさ  
 雲夢 桂雨  
 夕木 雲夢  
 湾丸 夕木  
 南北 湾丸  
 笈月 南北  
 遊志 笈月  
 五辨 遊志  
 壽山 五辨

新みやねもさきさき  
 系柳 新みやねもさきさき  
 秋の月もさきさき  
 笈丸 秋の月もさきさき  
 松岡 笈丸  
 左 松岡  
 南北 左  
 秋月 南北  
 遊志 秋月  
 友人 遊志

新巻うらたけ下りの江ノ幸舟物  
善しと遠くぬ名の船心  
その中の漁いぢんでいぢ  
神保り他人の身く人ぢぬぬ  
世にも引り神まゝとまゝ細路  
嫁のちりぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
にぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
信ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

糸柳  
源子  
菱丸  
遊志  
左  
雲夢  
月心  
雲夢

正巻うらたけ下りの江ノ幸舟物  
善しと遠くぬ名の船心  
その中の漁いぢんでいぢ  
神保り他人の身く人ぢぬぬ  
世にも引り神まゝとまゝ細路  
嫁のちりぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
にぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
信ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

志旭  
墨魚  
志友  
養子  
菱丸  
壽山  
浦丸  
月心  
捨丸

巻軸 土名 の むそりよ 遊人 ぢぢぢぢ

節之堂抄竹選

巻頭 とうねのりんでもんてきん

新さうし 白湯のきりぎりす

琴のたのしみ 食ふん

葉の刺の折れ 雲根の納豆汁

新めの料理の味 子ハ 世の

りも ぬれ 候 女房の 湯のぬれ

杜のうらみ ぬれ 平伏

葉のぬれ 湯のぬれ 尾のぬれ

一壽

故人

雲丸

若葉

雲城

南若

お木

左

神のたのしみ ぬれ ぬれ

葉のぬれ 湯のぬれ 尾のぬれ

葉のぬれ 湯のぬれ 尾のぬれ

神のたのしみ ぬれ ぬれ

へおの 一割のぬれ ぬれ

宵のたのしみ ぬれ ぬれ

葉のぬれ 湯のぬれ 尾のぬれ

葉のぬれ 湯のぬれ 尾のぬれ

葉のぬれ 湯のぬれ 尾のぬれ

お木

松岡

多若

竹丸

志友

高木

竹馬

若葉

桂雨



遊志  
 在来  
 遊人  
 榮亭  
 安吾  
 北本  
 雲夢  
 雲城  
 嘉月

掛しんくゝゝゝゝゝ 或日 嘉月

遊りたり一歩もまゝて遊目ん  
 移りたり一人 臨好之  
 う嬉けはゆなまゝ 柳の垂  
 朝の影くはりのまゝ 子親  
 勝も酒もまゝ 多香  
 海能ハ人程もまゝ 里蝶  
 那も石もまゝ 南北  
 養うくく肉もまゝの 青心  
 ころも花もまゝ 桂雨



雲人  
 文王  
 志友  
 清九  
 百廿  
 志友  
 里蝶  
 南北  
 竹馬

志友  
 原九  
 石子  
 お木  
 吉重  
 壽山  
 遊志  
 志好  
 哥月

己しきもの嘆のきりきり花うら  
 暮らしてきまきと料理のいふる  
 一日の縁の月をい 輝きけ  
 ひと玉の修あり 居の掛り人  
 大沼子の貸人 借り人の思ふ  
 世田の花籠 花のふけ  
 百ヶのねみきうむ天竺織襟  
 移移るまじり 三三三  
 衣柄よ花の移る毛徳

青山 岩丸 志友 照亭 お本 一毛 全 松岡 岩丸

此町の金新むかひとて嘆  
 あまののちんをききとや多き人  
 勢のせい 一代之の嘆ひ  
 空ういふまのまの遊記に  
 まご玉川集 嘆くまの毒  
 ねまやねまきと茶 縁や掛車  
 策のまへへまゆんまご十津と作を起る  
 移るまごまご 縁のまご角の移る  
 移くまごまご 縁のまごの権さ

巴勢 志角 原丸 里奥 其意 糸柿 止好 藤運 多吉



まごんろくく信ねの極るる  
たまさかろのまごね極るけ  
まごのそれとま極する人  
あ極るこい極るま書の実  
まごまご極るのまをま  
花をむりーの花をの書  
まごまごのまをのま 帯面  
まごのまをの極る  
まごまごのまをのま

原元  
志友  
巴勢  
土本  
松岡  
雲城  
糸神  
遊志  
百女

まごのまをのまをのま  
まごのまをのまをのま  
まごのまをのまをのま  
まごのまをのまをのま  
まごのまをのまをのま

まご  
極る  
まご  
志好  
まご

巻軸 まごのまをのまをのま

笠折句  
新板

推本下物評  
三種尺

此まゝ和歌三神等  
五葉句集の内秀全  
をえらび出ん

笠附  
折句

一日菴及朱評  
和歌の浦

此まゝ十葉句集の内  
秀全を本より初め  
道志より出ん

折句

浪毒十二評  
南紀五柳評  
芦辺の鶴

此まゝ八代吉原社へ  
細角力集より古今  
の名句をえらび出ん

折句  
大新板

浪花十二評  
紀の玉川

此まゝ八代吉原社へ  
名句をえらび出ん  
の勝劣をえらび

俳句  
風俳

浪花十二評  
櫻樽

此まゝ八代吉原社へ  
名句をえらび出ん  
の勝劣をえらび

俳諧書林

紀州若山新通二丁目

帯屋伊兵衛板

